

心郷土愛・深まる絆

産業は、農業です。安心安全な農作物を栽培する子どもは、農業者や、同年代の仲間と活気あふれる農業の魅力を探しました。

生活支援ハウス「すまい・ル」(6区)の隣に「すみっこファーム」と呼ばれる約30畝の畑があります。70〜80代のお年寄り8人がボランティアとして野菜づくりに携わり、知り合った仲間と畑仕事を楽しんでいます。

妹背牛町社会福祉協議会が管理する「すみっこファーム」では、これまで職員が中心となってジャガイモを栽培。ひとり暮らしの65歳以上の方にカレイライスを振る舞ってきました。

昨年度から、お年寄りが集う交流農園として管理方法を見直した背景には、野菜づくりを通じてコロナ禍の外出する機会を増やし、憩いの場をつくる狙いがあります。

ナスやトマト、大根など、お年寄りの皆さんが自ら選んで栽培する野菜は10種類以上に。昨夏には地元の子どもたちも交流



スコップを使う力仕事は男性の出番。畑のうねに黒いマルチシートをかぶせて、野菜づくりの準備を進めます。5月17日

社会福祉協議会の「すみっこファーム」



お楽しみみの休憩時間。野菜づくりの計画を立てる女性の会話も弾みます

農園に招待し、野菜を植えたり、とれ立ての農産物を使った料理を味わいながら、交流を深めました。

土づくりから栽培方法まで自分たちで話し合っており、主体的に野菜づくりを進めるお年寄りの表情も、澄んだ青空のように晴れやか。「この列にスイカも植えてみよっか？」などと、休憩時間の会話も弾みます。

活動期間は10月まで。5月17日に参加した女性は「1人で家庭菜園をしても寂しかったから、毎週のすみっこファームの活動が楽しみ」と笑顔。社会福祉協議会の職員も「自分たちで管理している畑という意識が芽生えて、自主的に取り組んでくれています」と喜んでいました。

コープさっぽろ お米たんけん隊 田植えツアー



「どこへ植えようかな」と、田植えを楽しむ男の子

コープさっぽろの組合員が農業を体験する「お米たんけん隊 田植えツアー」。5月21日に町内の「ふれあい農園」で開かれ、札幌市内の家族7組・17人が土の感触を味わいながら、楽しい思い出をつくりました。

都市部と農村部をつなぐ「お米たんけん隊」は2000年から始まり、新型コロナウイルスの影響で開催は2年ぶり。JA北いぶき妹背牛支所がツアーに協力し、農協青年部・女性部員らが参加者の作業を手伝いました。

子どもたちは「ななつぼし」の苗を手にとり、ぬかる足元にふらついたり、泥んこになりながらも、苗の手植えに挑戦しました。

